吉崎は蓮如さん以前から仏縁浅からぬ地

蓮如さんは文明3年（1471）4月、遠縁の三井寺塔頭（たっちゅう）万徳院（大津市）長命阿闍梨（ちょうめいあじゃり）に親鸞木像（御真影（ごしんねい））の管理を頼み、北陸に布教の新天地を求めます。その理由は、終わることのない比叡山による執拗な弾圧など、命の危機を感じることもあったためでした。

吉崎には唐珍坊（とうちんぼう）、唐来里（からくり）、仏教来（ぶっきょうぎ）、経塚と言う古い字名（あざめい）が残っています。『金津町の史話と伝説』によると、唐からやってきた僧侶がそこに住んでいたことが名前の由来とされ、蓮如さん以前から仏縁浅からぬ地だったそうです。

越前最北部で加賀との国境に位置する吉崎は、大聖寺川（だいしょうじがわ）と北潟湖（きたかたこ）の河口部にあり、加賀の安宅（あたか）と越前の三国湊を結ぶ海路の中継港、陸路でも吉崎道から北陸道につながる交通の要衝でした。蓮如さんが吉崎に来る前から、港湾部の竹の浦や春日社を中心とする原集落が形成され、11世紀には国司である藤原為房が立ち寄ったほか、「塩屋殿」と呼ばれる時宗僧漢阿（かんあ）が布教を行う等、港湾都市として一定の発展を遂げていました。

海運業で栄えた江戸期の吉崎

時代は下って戦国時代から江戸時代、塩屋港を含む吉崎浦一帯は三国湊、能登の福良（ふくら）湊との中継地点として廻船問屋等の商家が建ち並び、江戸時代の古地図にも港吉崎がひときわ大きく描かれる等、海運業で栄えていました。背景には北陸道、日本海の2大交通ルートに加え、これとつながる吉崎道、大聖寺川の水陸ネットワークがあったためとされています。

天正6年（1578)、柴田勝家が高木（福井市）に舟橋を架ける際には、越前の他の浦方とともに、吉崎と隣村の浜坂も舟を供出したと考えられます。また18世紀中頃、3艘の大船を持つ先の見谷屋が穀倉地帯加賀江沼郡の米14,500俵を大坂方面に送りました。吉崎の船主は北海道や大坂に拠点を持ち、多くの船を所有して交易に携わり、遠くカムチャッカ方面まで進出していたと言います。彼等の多くは「船底一枚下が地獄」の苛酷な稼業の中で、代々続く真宗信仰を拠り所としていたのです。

加賀の千代女が見た吉崎

「朝顔に　つるべ取られて　もらい水」で知られる加賀の千代女（1703～1775）が宝暦12年（1762)、60歳の還暦を迎え、蓮如の御忌に合わせて念願の吉崎参りを果たします。「今日という今日初めて吉崎に詣でける。その嬉しさ有り難さのあまり」で詠んだ句が、吉崎御坊跡に石碑として建つ「うつむいた　処（とこ）が臺（うてな）や　菫草（すみれぐさ）」です。さらに御山から鹿島の森や波松の松林が湖面にうつる景色を見て、「鴬（うぐいす）の　どちらが鳴くぞ　水の影」、「汐（しお）

越の　松や小蝶の　なかもどり」の二句も残しています。

千代女の残した『吉崎紀行』によると、加賀から越前に入る手前に宿場町橘宿があり、「四季色々　殊更春の　植木茶屋」との句を詠んでいます。そして、化粧垣内に入り、遊女たちが肌もあらわに床几に腰かけ、はしゃいでいるのを見て、慎ましやかな千代女は「涼しさや　はずかしいほど　ゆきもどり」と詠みました。

千代女は篤信の真宗門徒で、近江長浜の東本願寺別院、大通寺にも参詣し、住職横超院と句を交わしています。東本願寺法主の一族である横超院に平伏する千代女に対し、「手をあげよ　同じ流れに　住む蛙」と横超院が詠じると彼女もすぐに「日陰のわらび　腰をのしかね」と付句したと言います。

蓮如上人絵伝（本願寺文化興隆財団　蔵）

吉崎には、御坊時代の名残をうかがう地名が今も残されています。寺町、商家が軒を連ねた中町、鍛冶町、そして、千代女が顔を赤らめた遊郭のある化粧垣内等です。高野山、浅草寺、伊勢神宮と同じく、神社仏閣の周囲には精進落としと称する参詣者向けの歓楽街がつきものだったのです（『金津町の史話と伝説』）。

また、江戸時代の加賀藩の支藩である大聖寺藩は吉崎に番所を置き、越前への金銭流出を防ごうとしました。財政難になった大聖寺藩は文化年間、領民が吉崎へ参拝することを禁じます。時の為政者によって、吉崎参りが禁止されるほど、この一帯が港湾都市、歓楽街として栄えていたのでした。